HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	宮沢賢治童話研究 : その共生思想および自己犠牲への道程 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	閻, 慧
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第12827号
Issue Date	2017-09-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/67902
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Hui_Yan_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　閻　慧

主査　教　授　押　野　武　志
審査委員　副査　教　授　中　村　三　春
副査　教　授　権　錫　永

学位論文題名
宮沢賢治童話研究
――その共生思想および自己犠牲への道程――

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文の成果は、賢治文学における共生思想と自己犠牲との関連性を、時代背景を踏まえながら多層的な観点と方法から明らかにした点にある。作品との関わりを賢治の伝記的な事象や賢治と直接的な影響関係にあった人物の思想に限定せずに、同時代の言説の特質や近代日本の歴史的事象にも視野を広げて分析した。こうした歴史的なコンテクストにおいて、複雑な改稿による読解の多義性を担保しつつ詳細な作品分析を展開し、賢治童話を史的に位置づける試みとして評価することができる。

第Ⅰ部「越境・異文化接触・共生」においては、賢治童話における越境行為や人間と自然との交渉関係を異文化接触の寓意として読むことで、北海道開拓とアイヌ民族社会の解体といった近代日本の植民の歴史と接続させる。さらに、複雑な作品の改稿過程にも目を配り、他者表象がどのように変容したのかについても明らかにしたものであり、文学研究と同時代の言説分析とを有機的に結びつけることに成功している。

第Ⅱ部「食物・生死・農業」でも、作家論的なアプローチと作品論的なアプローチを歴史的な文脈において統合させる。これまで具体的には分析されてはこなかった、賢治の徴兵検査体験や菜食主義といった伝記的な事象と作品との関連性について、丁寧な作品分析を通して明らかにした。農業思想およびその実践と彼の文学との関連性についても、これまでも様々に論じられてきたが、当時の全国的な小作農問題、また産業組合運動の状況などに関しては、充分な検討が行われていたとは言いがたい。そのため、本論文においては、当時小作農問題を解決するため、全国的に見ると先進的な実践が行われた北海道という土地に注目しながら、賢治の農業と文学について改めて検証した。これによって、札幌農学校関係者との思想的な共通性や影響関係などが明らかにされた。

第Ⅲ部「賢治の共生理想と自己犠牲」では、第Ⅰ部・第Ⅱ部で明らかにされた、賢治の「共生思想」の特質を踏まえ、その実現方法として見出された「自己犠牲」をこれまでの研究とは異なる角度から照射した。仏教思想やキリスト教からの影響という従来のアプローチではなく、同時代に流布していた、武士道思想との共通性から、賢治の自己犠牲の思想を明らかにした。しかも、その武士道は、日本型家族国家ナショナリズムと結びつくような国家主義者によるものではなく、盲目的な自己犠牲を批判し、デモクラシーの平民道を提唱する新渡戸稲造の武士道思想が参照される。さらには、武士道思想に内在するキリスト教との親和性を内村鑑三との関わりの中で検証することで、新たな自己犠牲解釈を提出することができた。

そのほか、賢治と有島武郎、佐藤昌介らとの農業実践をめぐる関連性なども新たに指摘することで、札幌農学校文化圏の人脈が、賢治の中に確かな存在感を有していたことが論証され、北海道という場所、あるいは三度にわたる北海道訪問体験が賢治にとって重要な意味を持っていたことを浮かび上がらせることができた。

・学位授与に関する委員会の所見

本審査委員会において、本論文を通して展開されている、同時代言説と賢治作品との有機的な関連性については、概ね説得的に論証されていると評価した。しかしながら、賢治童話における、自然と人間とのコミュニケーションや越境による異文化接触の諸相が、先住者と入植者といった関係性の寓意として読み替えることで、賢治の植民地主義との関係性を分析する第Ⅰ部の分析においては、一部の先行研究に過度に依拠したものであり、その論拠に疑義が呈された。

また、賢治文学と武士道思想との関連性の分析についても、新説ではあるものの、その関連性が、影響関係に必ずしも依拠しない、同時代の同型的な思考なのか、新渡戸稲造の著書を介しての直接的な影響関係なのか、状況証拠による論証になっているために、判然としないという指摘もなされた。

しかし、このような問題点は、賢治文学における共生思想と自己犠牲との関連性を多様な角度から論じるという、本論文の対象領域の広さと射程の長さに由来するものであり、上述の研究成果をいささかも損なうものではない。

本審査委員会は、以上のような審査結果により、全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。